

## 1 はじめに

体育が苦手な子どもは、今も昔も一定数いる。子どもたちの「体育嫌い」の声を丁寧に聞いていくと、指導の在り方や児童・生徒の序列化、ジェンダーバイアスといった根深い問題が見えてくる。「体育嫌い」というこの問題の解決に向けて、私自身がこの問題とどう向き合い、どのような手立てを講じていくかを考え、これまでの教員としての経験や諸先輩方から教えていただいたことを生かして、この解決に向けて取り組んできた。本研究では、児童の「体育嫌い」を解消するために「生涯スポーツの基礎づくりを目指した指導法の研究」を主題に置いて研究を行った。

## 2 主題設定の理由

学習指導要領には「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。」と目標が明記されている。そこで、生涯スポーツの基礎づくりを念頭に置き、その実現にあたり体育的な活動を推進し、児童の興味関心を高め、運動に親しむ態度や運動の楽しさを味わわせることが大変重要であると考え、本研究主題を設定した。

## 3 研究のねらい

児童が体育的活動を通して仲間との信頼関係を築き、運動の楽しさを味わわせることで、生涯を通して運動に親しんでいけるように素地を築く。

## 4 研究の方法

- (1) ジェンダーバイアスを生まない学習カリキュラムの設定と運動の習慣化に向けた取組を行う。
- (2) 誰一人として取り残さない表現運動を実践する。
- (3) 合言葉は「ワンチーム！」児童が協働的に学びを深める授業の仕掛けを考え実践する。

## 5 研究の実践内容

- (1) ジェンダーバイアスを生まない学習カリキュラムの設定と運動の習慣化に向けた取組を行う。

### ① 運動会の表現種目とは別に表現運動を実施する。

本校では運動会で発表する「よさこいソーラン」を表現運動の時間に充てるのが定例となっており、4月下旬から5月上旬の体育授業は講師を招いて「よさこいソーラン」の練習を行っていた。この活動は、ダンスそのものの技能の向上に向けては有意義な時間であったが、児童が自ら動きを考えたり、協働的に一連の流れを組み立てて表現したりすることを体験することはできなかった。

表現運動の良さは性別や運動の得手不得手に関わらず、みんなで楽しみながら取り組めることにあると考える。そこで、表現運動を通して「体育嫌い」な児童が輝けるような授業をコーディネートし、多種多様な考えやアイデアを認め合える学級作りを目指した。

### ② 児童全員が未経験のタグラグビーに挑戦する。

タグラグビーを取り入れた理由は、児童全員が初めて体験する運動であったからである。ゴール型ゲームは、野球やサッカー、バスケットボールとスポーツ少年団に所属している児童が活躍する場面がどうしても多いように感じる。そこで、経験の少ない運動に積極的に取り組みながら運動の特性や得点の工夫を通して、学級の全員がタグラグビーに親しみ、運動の得手不得手を越えて学級の全員がチームの一員として活躍できるようにと願いを込めてタグラグビーを設定した。

### ③ 業間時間を活用した運動の励行

運動の習慣化や「体育嫌い」を減らすことを目的として、外遊びで推奨する運動を毎月児童に紹介したり、教師も一緒に運動したりすることで授業の主運動につながる運動や補強運動、基礎感覚づくりを行った。そうすることで、運動が苦手と感じる児童に自信がつくように支援してきた。具体的な内容は、宿泊学習に向けたフォークダンスの練習や普段の授業では扱うことのない相撲、授業内では定着が難しい児童を対象に鉄棒教室を実施して授業内で頑張りの成果が発表できるようにした。冬場にはサッカーやなわ跳びを勧めたことで厳寒期でも継続して体力向上ができるように配慮した。主な授業内容と休み時間に推奨した遊びの活動内容は

下記の通りである。

時期	体育授業	推奨した外遊び
4月	陸上運動	リレー
5月	ソフトバレー	相撲
6月	鉄棒・体力測定	フォークダンス
7月	水泳運動・保健	(熱中症予防)
8月	体作り運動	(熱中症予防)
9月	表現運動	鉄棒
10月	鉄棒・ソフトボール	鉄棒
11月	タグラグビー	タグラグビー
12月	マット運動	タグラグビー
1月	とび箱	サッカー
2月	バスケットボール	短なわ跳び
3月	体力測定(2回目)	長なわ跳び



(図1：休み時間の様子)

#### ④ 実践を通して

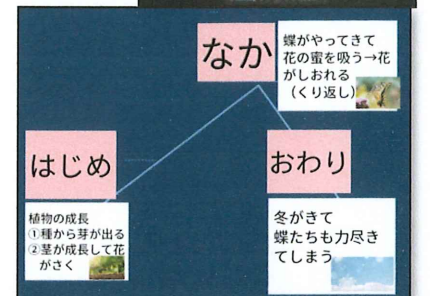
これまでの経験上、表現運動やタグラグビーといった運動は、専門的な知識や技能が必要で指導が難しいと感じてしまっていたことから、表現運動については運動会や学習発表会でのダンスの練習に充て、タグラグビーは他のゴール型ゲームで実施することが多かった。しかし今回、表現運動やタグラグビーを実施してみて、運動を苦手とする児童や女子児童がとても楽しんでいたことが印象的であった。また、業間時間に様々な運動を紹介して励行させたことや、教師も一緒になって体を動かしたことにより、普段は外遊びを好まず屋内で過ごすことが多かった児童が運動に興味を示すようになったことが成果と感じる。ジェンダーバイアスを生まないカリキュラムを設定して年間を通して体育的な活動を行ってきたが、小学生のうちから様々な運動に取り組ませることが生涯運動に親しむ素地を養うひとつのきっかけとなることを感じた。

#### (2) 「誰一人として取り残さない」表現運動を実現する。

##### ① ICT を活用して、個別最適な学び・協働的な学びを深める体育科の授業をデザインする。

表現運動の授業では、タブレットを使用して選曲をしたり、グループでシンキングツール(プロット図)を使いながら表したい感じやイメージを話し合わせたり

した。話し合いを行う際のポイントとして、タブレットを活用して変化と起伏のある「はじめ—なか—おわり」の構成を基にして、具体的な動きを考えて、表現したいイメージに近づけさせるようにした。どのグループも協力して話し合い活動を行ったことで、ひとまとまりの動きをイメージして上手に表現することができた。(図2)



(図2：ICTを活用して表現の構成を考える)

##### ② 誰一人取り残すことなく協働的に学び合う

授業では毎時間、友達の良いところを見つけて紹介させたことや、役割分担をしてグループの一員として活動させたことで、グループの一員としての使命感、自己有用感を育んできた。また、話し合い活動の際に、友達の意見に耳を傾けて肯定し、認めてあげることを意識させたことにより、話し合いの中で新たな動きや表現の仕方を考えて協働的にひとつのストーリーを考えてグループの全員が力を合わせて表現することができた。

##### ③ 実践を通して

隙間時間を使って話し合いの時間を十分に確保したことやICTを適宜活用して動き方や構成について考えさせたことで、効率良く表現の仕方を考えさせることができた。そして何と言っても、児童全員が創作活動を楽しむことができたことで、誰一人として取り残すことなくみんなで表現運動を楽しむことが実現できたと感じる。単元の終わり(8/8時間目)に実施した発表会では、どの児童も全身を使って表現運動に取り組んだり、仲間と考えた構成の通りに表現したりすることができた。(図3)



(図3：構成を意識して表現する)

#### (3) 合言葉は「ワンチーム！」児童が協働的に学びを深める授業の仕掛けを考え実践する。

##### ① きょうだいチームで対話的で深い学びを実現する。

タグラグビーの授業を実施するにあたって、グループの編成を異質グループで形成することやきょうだいチームを設定したことで、得意な児童が苦手な児童に教え合う機会を設定した。さらにチーム内での自分の役割を明確にすることで、チームの一員としての自覚をもたせた。授業では、自発的に撮影した動画をきょうだいチームで確認し合い、作戦の効果を確認することや動きのポイントを教え合う姿が見られた。単元の後半に進むとゲームで出た課題の改善のために、きょうだいチームで話し合ったり練習したりする姿がみられ、互いに高め合うような良好な関係を築くことができた。(図4)



図4：協動的に学ぶ仕掛け①

②誰もがチームの一員として活躍できる場を設定する。

キャプテン、副キャプテン、得点係、動画係や記録係といった係を設定し、チーム内での自分の役割を明確にすることによって、チームの一員としての自己有用感を持たせた。(図5)

役割分担	チームの一員としての自覚をもたせる
役割：仕事内容	
キャプテン：チームのリーダーです。みんなに声かけてチームをまとめよう。苦しいときこそ声を出して盛り上げよう。	
副キャプテン：学習カードの箱を準備しよう。ピブスやタグが正しく付けられているか確認しよう。	
得点：得点板、タグ、ピブスが入っている箱を準備しよう。試合中は得点板を持って自分たちの得点やきょうだいチームの得点をみんなに伝えよう。	
動画：良い動きや作戦がうまくいっているかを撮影します。作戦タイムで確認できるように、全体の動きがわかるように撮影しよう。	
記録：きょうだいチームのタグを取られた回数やパスした回数などを数えよう。	

図5：協動的に学ぶ仕掛け② ※学習カードより抜粋

また、チーム名を決めさせることやマスコットキャラクターを考えさせることで自分のチームを大切にしていこうとする気持ちを高められるようにした。これは運動に対して苦手意識をもつ児童にとって大変効果的であった。特に女子児童において、イラストを描くことを好む児童に対してとても有効的で、自分が描いたイラストがチームのマスコットキャラクターになると、運動に対してやる気と仲間意識が高まった。また、タブレット活用については、作戦や動き方を考えるための学習シートを配信することで、体育の授業時間外に自

主的に作戦や動き方について考える児童が増えた。(図6)

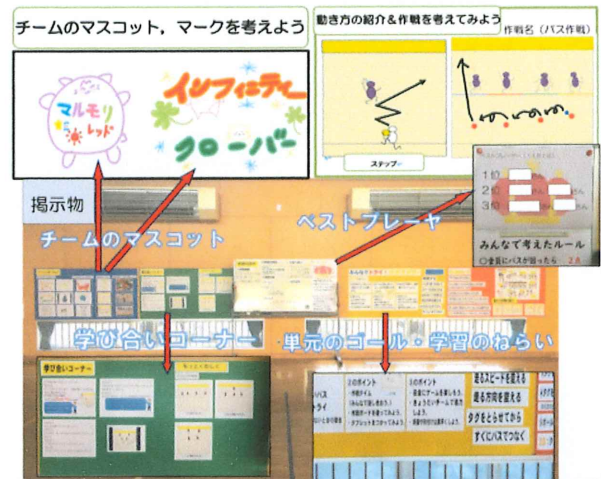


図6：協動的に学ぶ仕掛け③

③ 児童の興味関心を高める教材・教具の作成

タグラグビーでは使用する教具が多いため、各チームに収納箱を用意し、全てその中に入れて管理するようにした。(図7) 授業を重ねるごとに素早く準備することができるようになり、体育館に入ってからピブスとタグベルトを着用して準備運動を開始するまでに3分以内でできるようになった。その結果、授業内での運動量確保にも繋がりが、自然と技能も高まっていった。

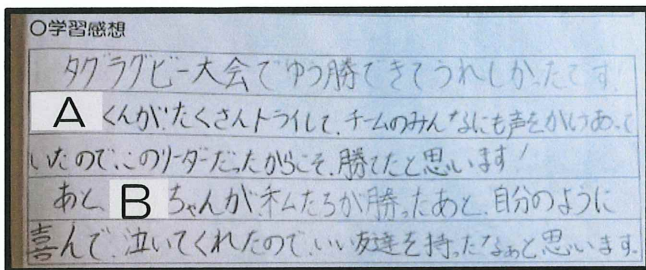


図7：教材・教具の工夫

④ 実践を通して

タグラグビーの授業では、児童の実態に合わせた指導計画の工夫や新しいルールのお話し合いによって、児童にとって易しいゲームをみんなで作り上げてきた。その結果、スモールステップで技能を高め、ルールを理解しながらみんなで思いきりタグラグビーを楽しむことができた。そして、きょうだいチームを作ったことや教え合いの場を設けたことで、全ての児童が考えを共有し合い、教え合うことで徐々にチームの結束が強まっていくことを児童に体感させることができた。また、それぞれが自分の役割を担ったことで責任感が生まれ、チームの一員として自覚をもって一生懸命取り組む姿が見られるようになった。児童の自主性を重んじて、協動的に学びを深める活動にこだわって指導を行ってきたが、単元開始時には運動に対して苦手意

識を感じる児童が、試合に負けて涙を流す光景や授業感想で素晴らしい感想を書いていたのを見て、今回の取組が児童にとって大変有意義であったことを実感することができた。(図8) 加えて、作戦表や動き方の例をデジタル化して配信したことで自発的なICT活用ができ、運動量を確保しつつ効率的な活用ができたことは、個別最適化された体育授業についての手掛かりを掴むことができたと感じる。今回の研究では、様々な手立てを講じてきたことで毎時間児童の成長を感じることができ、なんとと言っても運動を苦手とする児童が活躍する姿が本当に嬉しかった。



6 まとめ (図8：単元終了後の学習感想より)

体育授業や体育的な活動を通して「体育嫌い」やジェンダーバイアスといった問題を解決するために、これまでの経験を生かした手立てを考えて実践してきた。私自身のこれまでの価値観や本校の当たり前から脱却し、新たな視点で新しい取り組みを提案して実施したことで児童の運動に対する意識が変化し、ジェンダー平等についての意識付けができた。今回の取組によって児童の運動に対する興味関心が高まったことで、学びが次の活動へと発展し、相撲については、令和4年7月3日に栗駒中学校の相撲場で開催された宮城県学童相撲大会に男女各2名が出演し、団体戦で準優勝となった。(図9) また、タグラグビーでは、北部教育研究会での授業公開後の令和4年12月3日にシェルコムせんだいで開催された全国小学生タグラグビー大会宮城県予選に19名の児童が参加した。



(図9：相撲大会の様子)

(図10) そこで体育授業での学びを生かして、県内の小学生と共にタグラグビーをプレーしてきた。この大会は目標であった1勝が遠く、勝つことはできなかった。しかし5年生主体のチームで、「来年も必ず出場したい。」という頼もしい声がたくさん聞かれ、この言葉を聞いて私自身がこれまで指導してきた甲斐があったとすごく感銘を受けた。これらのことは本研究会の主題である生涯スポーツの基礎づくりに近づく大きな一

歩になったと感じる。



(図10：児童の活躍が雑誌、新聞に掲載された)

本研究を通して、児童にいろいろな運動に挑戦させたことで、運動の楽しみを実感させることができたことや運動を楽しませるための手立てを考えて仕掛けることで、児童の気持ちが高まり「みんなで考えた表現を成功させたい。」「チームのために活躍したい。」「この班のみんなで勝ちたい。」と仲間意識を高めることができた。そして、その運動を心から楽しむ態度を育むことができたように感じる。その結果、児童同士の思いやりの気持ちが高まり、良好な人間関係づくりができたことで学級にはいつも笑顔が絶えなかった。男女間や技能の格差を思いやりの気持ちで埋めることを意識した体育的活動を1年間続けたことで、令和5年度の運動

R5 体力テスト 6年生のけっか

項目	男子	女子
50m	12.8	14.2
100m	27.5	31.5
200m	58.5	68.5
400m	1:45.5	2:05.5
800m	3:58.5	4:45.5
1000m	5:05.5	5:55.5
1500m	7:15.5	8:05.5
2000m	9:25.5	10:15.5
2500m	11:35.5	12:25.5
3000m	13:45.5	14:35.5
3500m	15:55.5	16:45.5
4000m	18:05.5	18:55.5
4500m	20:15.5	21:05.5
5000m	22:25.5	23:15.5
5500m	24:35.5	25:25.5
6000m	26:45.5	27:35.5
6500m	28:55.5	29:45.5
7000m	31:05.5	31:55.5
7500m	33:15.5	34:05.5
8000m	35:25.5	36:15.5
8500m	37:35.5	38:25.5
9000m	39:45.5	40:35.5
9500m	41:55.5	42:45.5
10000m	44:05.5	44:55.5

(図11：本校の掲示物より)

能力テストの結果(図11)において、8種目中6種目で県平均を上回り、大幅な記録の向上が見られた。それに加えて全国学習状況調査の結果も国語、算数ともに昨年度の結果を上回る結果となり、運動に意欲的に取り組む児童が学習にも良い効果を与えたと考えられる。

今後の課題としては、前述の通り表現運動やタグラグビーの指導にあたっては、専門的な知識や指導力を要して敬遠されがちな状況にあるが、私自身がこれまでに培った指導技術や実践した成果を職員に伝え、「体育嫌い」を減らす取組を今後も続けていきたい。

〈参考文献〉

「小学校学習指導要領解説 体育編」  
 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実 (文部科学省)  
 「体育嫌い」を考える (令和4年11月20日朝日新聞朝刊)